

〈インタビュー〉第一高等学校・東京大学における戦後学生自治活動(二)

— 岡田裕之氏に聞く —

田中 智子

前号に引き続き、敗戦直後の第一高等学校および東京大学において、学生自治組織の活動に関わった岡田裕之氏のインタビュー記録を紹介する。当初の予定では、二〇〇八年一月二〇日に法政大学において行ったインタビューを、二回に分けて紹介する予定であった。しかし、前号掲載分の訂正事項や内容の補足の必要性が出てきたため、インタビューを再録し、今号に掲載することにした。本インタビューは二〇一一年五月二六日、法政大学市ヶ谷キャンパスにて、前回と同様に筆者と一対一の対談形式で行った。その後岡田氏自身が加筆修正を行い、さらに補足が必要な箇所には、筆者が注釈をつけている。

〈岡田裕之氏インタビュー〉

一、前号掲載分の訂正事項等

岡田 本日はどのような主題になりますか？

田中 五〇年一〇月のレッド・パージ反対運動について、東大駒場

(教養学部)の運動は以前他の方に伺いましたので、東大本郷(各専門学部)の状況を知りたいと存じます。

岡田 『東京大学史紀要』第二九号に二〇〇八年の「論文・〈インタビュー〉第一高等学校・東京大学における戦後学生自治活動——岡田裕之氏に聞く——(一)」が掲載されましたが、その続きと
いうことでしょうか。私としては、二〇〇八年インタビューでかなり詳しくお話ししたので、未掲載の分を(二)に掲載していただければ、特に追加はないのです。

ただ(二)について佐藤経明氏より訂正を求められましたので、訂正しておきたい。佐藤氏は、一九五〇年六月二五日、朝鮮戦争勃発時に東海道本線に乗り、岡田・出島・佐藤の三名で議論した記憶はないが、とのことでしたが、当時岡山には家族は居住せず、従って「帰省はありえない」と明言されました。同時に、氏は日時に記憶はないが、広島高等師範(自治会?)をたずね、そこで「運動方針を示してくれ」と問われた記憶がある、との話でした。

従って「岡山に帰省する」佐藤経明君と乗り合わせたという、同誌九三頁の記述は誤りで、私の記憶ちがいでした。ただ佐藤君も全学連オルグで「中国学連」を組織する任務を帯びて乗車していた、と推定できました。岡田・出島・佐藤の三名は同じ任務を帯びて列車に乗り合わせていたのです。あるいは三人は予定通り同じ列車に乗ったのかもしれませんが。これは後述の全学連中執による反レッド・パーヅ闘争の準備であって、佐伯孚治君と下川英雄君が同時に「九州学連」の組織化（実際には国際派共産党の組織化）の任務を託された事実と符合します。佐伯君の記録では「下川は約束の列車に乗車したのに自分が寝坊して乗り遅れ、僕を車内ですつと探したと怒っていた。自分が福岡に到着した時に朝鮮戦争が勃発した。下川はすでに反帝（反米）デモを組織していた。」と書いていますから¹⁾。

二、一九五〇年一〇月レッド・パーヅ反対運動、東大本郷の場合

田中 そのように訂正しておきます。では五〇年一〇月の本郷での運動についてお話しください。

岡田 東大本郷での運動というのですが、当時東大本郷は反占領軍、反レッド・パーヅ運動の中心司令部でもあって、私は全学連指導部でも東大細胞指導部でもなく、反戦学同、経済学部自治会の、いわばランク・アンド・ファイル（下級兵士）の一活動家に過ぎませんでしたが、それでも国際派組織内の討論は心得ていました。東大本郷の反レッド・パーヅ運動は従って全国方針とともに語ら

ざるを得ませんし、また当時進行中の朝鮮戦争の成行きとも不可分のものでした。今述べた六月の北陸学連、九州学連、中国学連組織化の構想も一〇月闘争の伏線として、反占領軍を掲げない共産党主流派が押さえる関西学連、北海道学連と対抗する準備でした。ここが試験ボイコットを闘った前線舞台の東大駒場教養学部——旧制東大に対して新制東大、「新東」と略称で呼んでいました（東大は四七年「東京帝国大学」から「東京大学」となり、四九年「新制東京大学」となり一年生入学、五〇年が「旧制東大」最後の入試となりました）——の一〇月闘争との違いでした。

こうして東大本郷の反レッド・パーヅ運動は、四九年からのC I E顧問イールズの「共産主義者を大学から追放せよ」との全国大学演説行脚から始めなければならぬし、五〇年一月のコミンフォルム批判から始める必要があるのです。イールズ演説はさらに四八年の「大学法案」いわゆるB・T（大学管理理事会）案にさかのぼり、四九年の教育復興・大学法反対の五月二四日の全学連の全国スト（一三九校、二〇万人参加）にまでさかのぼることになります。

田中 B・T案反対運動ですね。四八年に授業料三倍値上げ反対運動と相俟って、大規模な反対闘争が繰り広げられました。

岡田 四八年の授業料値上げ阻止の六月二六日の全国学生スト（二二〇大学、二〇万人参加、略称六・二六闘争）に続く五・二四闘争です。この大学法は今日の国立大学の「独立行政法人化」に

連なるもので、現代的な意味もあります。

田中 そうですけど、紙幅の都合もございませぬので、五〇年の一〇月に焦点を当ててくだされんか。

岡田 そうですね。そうなるかとレッド・パージの起点は七月二四日の占領軍による新聞放送関係からの共産主義者、同調者の解雇です。状況はいうまでもなく勃発した朝鮮戦争への臨戦態勢によるもので、アメリカは前線基地となった日本を反共の砦に固めるため、七月米軍出動後の空白を埋めるべく「警察予備隊」を創設します。今日の自衛隊の前身です。共産党機関紙「アカハタ」も無期限発禁となります。そして九月一日、政府は公務員のレッド・パージを一一七一名と人数をあげて決定します。公務員には国立大学・高専の教員が含まれます。「大学からの赤色教授追放」です。全学連は緊急事態と認識し全国的な闘争方針を決定します。

田中 それは『一・九会文集』第六集の年表⁽²⁾にあります。

岡田 犬丸義一君と石井和夫君が作成したものです。お渡ししましたね。

田中 はい。

岡田 我々国際派は、朝鮮戦争を「南側・韓国の北侵をアメリカが後押しして始まった」と考えていました。資本主義が戦争の原因で、社会主義は平和擁護側だとイデオロギーで決め付けていたのです。現在では、北朝鮮が南侵を実行し韓国に不意打ちをかけて、

国連軍と米韓軍は当初、敗北後退し半島南部まで追い詰められた経過が判明しています。ソ中の共産圏は北の南侵を予定してこれを支持し、そのために年初にコミンフォルムは野坂批判で日本共産党に背後のゲリラ闘争を呼びかけたのです。我々の分析は幼稚だったのですが、冷戦の錯雑した国際政治の状況は学生の分析能力をはるかに越えていました。東大国際派は、力石定一君や戸塚秀夫君の「鋭利な」、ただし幼稚な分析に感心し、それに従いました⁽³⁾。

ただ大学は夏休みだったし、原爆禁止のストックホルム・アピールの署名集めをしたり、農学部校舎を借りてシベリア帰還兵の山本弘文君を校長に「高校文化会」なる新制高校生むけの学習会を開いたりしていました。高校生の人気は上々、生徒も多く運動資金集めかたがた私も「時事問題」の講義を担当し、講義料を貰ってよいアルバイトとなりました。一兵卒でしたからそれほどの緊迫感はなかったのです。ところが、夏休みが明けると一〇月闘争に向けて大車輪の奮闘の日々となりました。

岡田 我々の国際政治分析は幼稚でしたが、反レッド・パージ闘争は真剣なものでした。(「わだつみの悲劇を繰り返すな」の叫びは闘争を通じてのスローガンでしたが、運動の底には、直前の第二次世界大戦の日本戦没学生の悲劇がありました。彼らは、学芸の道を選び学問によって国家社会に尽くそうとしたのですが、敗勢傾く日本国家の要請に従って戦死しました。そして敗戦。学生た

ちはこうした直前の先輩たちの悲惨な最期を繰り返したくないと堅く考えて闘争に参加したのです。我々のアピールに応えた学生達も真剣でした。四九年『きけわだつみのこえ——日本戦没学生の手記』が東大協同組合出版部から刊行され、当時のベストセラーとなり、広く学生に読まれていました。

この本は、昭和前期の軍国主義時代を「暗い谷間」と認識し、戦争の第一段に思想弾圧があり、当初は「共産主義思想の禁圧」に始まりながら、最後は「自由思想一般」の禁止に至って遂に戦争への疑問まで一切否定し、国民精神総動員で「大日本帝国」の崩壊に至った経過を示しています。この教訓はまた、学生よりはこの時期の大学の苦悩を体験した教授層においていっそう深いものがありました。ここに冷戦下、反共一本槍で日本の大学と学生を制圧しようとした占領政策の大きな誤りがありました。アメリカは占領初期には日本は「アジアのスイスたれ」などと非武装中立（スイスは武装中立ですが）と軍隊の解体を求めながら、米ソ冷戦に入ると手のひらを返して「反共の防波堤たれ」と変貌する。これにも反発がありました。

南原総長の回想によると、東大は名前のあがった教授を追放するなど考えてもいなかったようですが、その通りでしょう。結果として見ていわゆる共産系教授はほとんど追放されていません。著名教授では神戸大の小松撰郎さん、水戸高校の梅本克己さんが追放されましたが、両者とも旧制から新制への学制切り替え時に採用しなかった形をとっています。追放ではなく新規不採用です。

中身は変わりませんが。警戒して文部省が採用しなかったのですね。大学でのレッド・パージは学生の行動と犠牲によって阻止できたのですが、占領軍・政府文部省・大学教授会と立体的に考察する必要があります。

岡田 一〇月闘争に戻ります。夏休み明けに全学連は反レッド・パージの闘争方針を立てますが、学生運動はひとつのキャンペインの山場までは、活動家の演説・宣伝・説得による趣旨の普及が先行します。春の反占領軍闘争も教室や学生集会での活動家による演説・宣伝から始まり、集会などで盛り上げて、学生大会におけるスト決議、街頭デモその他の行動に至ります。私も入学早々、先輩党員に指示されて七分間教室アジテーション（演説）を實行しました。人前で大声で演説するなど苦手で私の好むところではありませんでしたが、先輩党員の竹中一雄君や本村勝造君など容赦なく「誰でもできるから」と言って演説を七分間持たせる粗筋を示唆します。名だたる教授が登壇する前に前座宜しく大教室数百人の学生の前で演説をぶつのですから最初は足が震えますが、何回か登壇すると慣れてきて少し教授を待たせて演説を続けたりします。だんだんと厚かましくなり、自分で進んで演説をするし、新米活動家に演説を手ほどきするようになります。私は東大の教員になったことはありませんが、新入生の中から黒板を背景に教壇に立ちました。

ところが五〇年九月、いざ反レッド・パージ決戦の出番となっ

た時、九月の全学連を待ち構えていたのは前期試験でした。大学は所定の単位数の試験を受けて合格しないと卒業できません。単位取得は学生の関門で、真剣に勉強し復習しないと合格はおぼつかない。サボ学生ならなおさら友人のノートを借り集め、講義プリントを買い込んでねじり鉢巻で勉学に集中しないといけない。試験は半月ほどかかりますから、前期試験を受けているとレッド・パージは実施されてしまいます。さりとて試験中に宣伝したり演説したり、集会に動員したりすることができますか。

ここから逆に、試験を受けてレッド・パージを黙認するか、それともレッド・パージを阻止するために試験をボイコットし、闘争体制を固めるのか、と全学連は問題を提起し直して「試験ボイコット」という新しい戦術を採用します。闘争は九月末の試験ボイコットで開始され、一〇月五日、東京都学連のストから本格的な闘争スケジュールに入り、五〇年一〇月二〇日に、四八年の六・二六、四九年の五・二四に続く全国学生ストを実施する、ということものでした。

田中 そこで東大駒場の激しい試験ボイコットとなるのですね。

岡田 東大本郷は各学部別々だし、文学部・理学部はさらに学科別で大教室試験はなく、試験ボイコット戦術は取らずに反対運動を展開できましたが、教養学部は統一試験だし、前期試験で大きく専門学部進学先が決定される（進学先振り分け、進振り）から、

前期試験は学生にも学部当局にも死活の行事なのです。

最初に試験ボイコットに入ったのは法政大学でした。これは『法政大学と戦後五〇年』に詳しいが、九月二五日、法学部と文学部国文科、哲学科は試験ボイコットとなり一〇〇〇名の緊急学生大会を開き、一〇・五全都ストを決議する。法政大学ではこれが大学の教育秩序違反という理由で一〇月一六日、三二名を処分、学生は処分反対闘争に入り、小田切秀雄、近藤忠義、西郷信綱、菰淵鎮雄、田代正夫、上杉捨彦ら諸教授が学生支持のメッセージを公表する⁴。一六日の法政の集会だったか東大からの応援で集会に参加しましたが、出陣東大教授からのメッセージが配られ、そこでフランス・レジスタンスの詩人ジャック・ドクルールが引用されて「わだつみのこえを繰り返してはいけない」とありました。こうしてレッド・パージ反対の学生運動と教授層の連帯が示されたのですが、管理責任者である総長・教授会は異なった立場を取りました。つまり試験ボイコットは教育秩序違反であり許しがたく、大学は静粛な学問の府であるべきだ、との立場です。これは後に「三教授（菰淵、田代、上杉）事件」として訴訟となり、解決は長引きました⁵。六〇年代、私自身この大学の教授となり、講義、試験、入学卒業判定の義務を負うこととなり、他方では処分も辞さない正義感ある学生の秩序違反行為にいかに対処すべきか悩むこととなりました。法政大学の五〇年一〇月試験ボイコット闘争の処分学生でも、復学し他大学を経由して法政大学の教授に戻った人もいました。大内兵衛総長にしても、戦中一九三八年

の第二次人民戦線事件で東大を追われた方ですから、「赤追放」には反対です。しかし大学人として秩序違反は許さない。大内総長時代、法政大学は「野党アカデミズム」を称して随分とマルクス主義系の学者を採用しました。広く言えば私自身その流れの中で法政大学に職を求めたのでしよう。

田中 大学の教育秩序の維持と学生教育のむずかしさですね。

岡田 試験ボイコットは新戦術で全学連執行部も不安でした。東大本郷ではそうした体験はありません。駒場のボイコットでは安東仁兵衛君が書いていますが、駒場寮委員から、「二九日のボイコットにはスト破り学生対策に八〇〇人のピケ隊を動員ができる」と報告を聞いてびっくりし、「それなら何も会議をやって相談することもない」と安心したとあります。

田中 そこは自治会委員長だった大野明男さんの『全学連血風録』にも詳しく書いてあります⁶⁶。

岡田 駒場のボイコットについては報告や記録から知っているだけです。私は本郷で一〇・五ストの学生大会に向け宣伝、演説、ピラ配りと大忙しでしたから。学内集会ですが、屋上から「占領軍の即時撤退」などと太字で書いた垂れ幕をたらしした時などは興奮しました。マッカーサーにひれ伏して一言もない保守党やら日本共産党などの政治勢力よ思ったか、という意気込みです。『全学連血風録』には当然矢内原忠雄学部長のことも書いてあるで

しよう。

田中 「キミ・ボク論争」の矢内原さんのことでしょうか？

岡田 力石・矢内原の「キミ・ボク論争」は四九年五・二四闘争の時⁶⁷のことです、その時は矢内原さんは旧制東大の経済学部長でした。五〇年には矢内原さんは新制東大の教養学部長です。矢内原さんもファシズム犠牲者で三七年、日中戦争批判で東大を追われています。レッド・パージ反対でファシズム犠牲者だった教授と戦後の学生が争うのは悲しいことでしたが、学生運動がスト戦術やボイコット戦術を採れば対立はやむをえないところでず。

ボイコット翌日の三〇日、矢内原学部長は自ら警察隊をつれてピケの排除を試みました。試験ボイコットに反対で試験を受けたい学生も多数います。学生投票ではボイコット賛成が一八〇〇、反対が一〇〇〇と言う数字です。二学年で約三〇〇〇名として二対一です。学部長はこの試験を受けたい反対派を当てにしていたのです。警察の実力行使にピケ隊は破られ正門への道は開かれました。ところが受験のために登校し、ピケ隊に阻まれていたボイコット反対派の学生たちは構内に入ろうとしません。反対派の一人は「警察の力を借りてまで試験を受けたくない！」と叫びました。この叫びは真実でした。これは感動的な場面でした。

田中 『全学連血風録』にもその場面があります⁶⁸。

岡田 感動的なシーンですね。スト破りの学生までが学部長の言う

ことよりも反レッド・パージの方が大事だ、学生が自主的に決めたことは守ろう、警察に守られてまで受験はしたくない。反対かと思われていた学生までが同調する。これは予定外の出来事です。が、闘争が高揚に向かう時にはこうした場面が起こります。矢内原学部長はすっかり浮き上がってしまいました。学部長は試験実施をあきらめて中止を決定しました。試験ボイコット戦術は成功しました。

田中 本郷も盛り上がったのですか。

岡田 ここから一〇・五の全都ストまでは高揚しました。一〇月二日には東京外語大、早稲田大文学部が試験ボイコットに入ります。東大本郷では法学部学生大会がストを否決しますが、経済学部、文学部、理学部、医学部、農学部と学生大会はストを決議します。工学部は非政治的でほとんど学生運動に加わりません。法学部は活動家も多いのですが、反対派も多く手続論のミスについて活動家をたじたじさせる論客がいます。学生大会は激論です。法学部はスト提案を否決しました。全学連の拠点学部は経済学部と文学部で、理学部、医学部は活動家に対して学生数が少ないので討論はスムーズでした。農学部は活動家が多くまとまります。

岡田 一〇・五は東大内でレッド・パージ粉碎全都学生決起大会でデモが行われました。朝鮮戦争下、デモは禁止ですから警察不介入で守られた東大内でデモ行進をするほかありません。東大は

もちろん公認はしません、さりとて警察力を使って解散させることまではしませんでした。雨中のデモ行進となった記憶がありますが、反レッド・パージ闘争のハイライトで胸を張って行進しました。安東君、高沢寅男君を先頭にした四〇〇〇人のデモの写真が残っています。

田中 どうして学内デモですか？

岡田 もちろん可能ならば堂々と街頭デモ行進をやりたい。しかし全学連（東京都学連）は五月一六日、日本最初の反帝デモ、実際には反米デモを実施し市民の共感を得ました。これをモスクワが支持します。わだつみ会は六月一三、一四日、映画『きけわだつみのこえ』の中央試写会を共立講堂で開催する予定でしたが神田署に禁止されます。占領軍の指令です。六月一六日には集会、デモは全面禁止となり、政府の抗議で緩和されますが、反占領軍の集会デモは禁止です。朝鮮戦争とともに禁止は厳しくなります。大学は大学の自治、学問の自由の権利慣行の下、大学当局の許可なしには警察不介入が原則です（事実とは異なり、警察は随時学内に入り込み情報を収集していました。これは五二年の劇団ポポロ事件、警察手帳事件で暴露され、矢内原総長は国会で抗議します）。反レッド・パージ闘争は大学の自治を守る運動でもありましたが、著しい秩序違反でなければ東大当局は学内デモなら禁止しないだろう、と全学連は見込んだのです。

実際、一〇月闘争に際して、東大当局（総長・学部長会・評議

員会)は東大内の集会は禁止しませんでした、でもそれはあくまでも東大の内部のことで、集会への学外学生の参加は認めません。一月五日、本郷通り正面の鉄扉は閉じられ、大学は、学外から学生が参加するのを阻止し、警察がそれを守ります。ストを行って東大に集まる学生たちが次第に本郷通りに溢れます。東大内からは我々東大生が本郷通りの都学連の学生たちと合流しようと正門に内部から迫ります。正門の鉄扉を挟んで東大生と警察隊が向かい合い、有斐閣側には早大生の大群が集まっています。緊張の瞬間でした。と、突然黒い影が文字通りましら(猿)のごとく鉄扉に取り付きすると登り、鉄扉を閉ざす鍵をハンマーで叩き割りました。これを中から東大生かギギと引き開けます。そこへ早稲田の密集した学生が学内にザーと流れ込み、続いて諸大学の学生が東大内になだれ込みます。これは瞬間の出来事のごとくであり、スローモーションの一シーンのごとくでした。ともあれ咄嗟の一東大生の行動が全都学生を奮い立たせ、決起大会とデモを成功させました。これは感動のシーンでした。

岡田 この瞬間に鍵を打ち壊した勇敢な学生が堤清二(辻井喬)君で、著書『彷徨の季節の中で』に書いています(9)。堤君は活動家の中ではもの静かで文学青年の趣ですが、いざここの勇氣と決断はさすがです。演説も行動も派手で号令をかけては人前に目立ちたがる活動家の型、作戦を立てて参謀然と陰に回りデモを観察する型、など活動家にはいろいろな型があります。

田中 岡田さんは何型でしたか？

岡田 私は黙々と働く一兵卒型です。一〇・五スト・集会・デモは成功しました。我々は指導者とともに運動はここからさらに発展すると考えました。九月、マッカーサーは朝鮮の仁川上陸作戦を実施して、半島南部に追い込まれていた国連軍の状況を一変させます。北朝鮮軍は背後を突かれ算を乱して退却します。米軍は平壤を占領し北進を続けます。米軍が鴨緑江にせまる勢いでいるところに、中国軍が義勇軍として戦争に介入、第三次世界大戦の危険が迫ります。ソ連軍は航空機で戦闘に参加していました。五年四月の東大生一六人の軍裁事件は、マッカーサーの仁川上陸作戦に際し日本人労働者が機雷除去に動員され、二四七名が戦死した事実を暴露したことが発端でした。

一〇・五、東京での成功を全国へ広げようと活動家が全国へ飛びます。六月に組織した金沢大学に派遣されたのが東大伊藤茂君と早大大金久展君らで一七日、スト・デモを組織しました。レッド・パージ粉砕ならざる「レッド」(促音ではなく直音で発音)・パージ粉砕の大デモだったそうです。五日神戸大、一三日佐賀大、一七日金沢大、二〇日大阪市大、二八日立命館大と京大でも反戦学同が運動しました。

田中 反戦学同が中心だったのですね。

岡田 もちろんです。主流派は反レッド・パージ闘争を全学連Ⅱ国際派の「跳ね上がり」と反対し妨害しました。

三、全国ストの頓挫と国際派の衰退

田中 共産党の分裂ですね。駒場（新制東大）は主流派が強く、本郷（旧制東大）では国際派が強かったのでしょうか？

岡田 それが一〇・五から一〇・二〇への闘争スケジュールを狂わせた一つの原因です。ともかく一〇・五で本郷、都学連は高揚し、いざ全国へ反レッド・パージの火の手を広げようと意気盛んでした。だが運動のピークはそこまでで勢いは急速にしぼんで行き、ついに我々は一〇・二〇全国ストにたどり着けませんでした。運動の勢いには恐ろしいものがあります。

「試験ボイコット」は感動のシーンを含め成功しました。しかし同時に、大学の正常な行事を破壊する全学連・反戦学同の行動には本質的な難点がありました。「試験ボイコット」は全学生に深刻な問題を提起し、レッド・パージという政治問題を考えさせ、行動を要請する衝撃的な戦術ではあったのですが、やはり劇葉で大学は日常の教育の場です。そしてそこでこそ学生活動家が演説や宣伝や集会で政治的主張を普及させることができます。だが試験ボイコットで大学の正常教育が滞ると多数の学生はどういう行動を取るか。活動家は興奮を続けて毎日登校し活動するでしょう。だがそうでない学生は先ず登校しなくなるでしょう。

六〇年代末、東大の全共闘（全学共同闘争会議）はバリケード封鎖の無期限ストを実施しました。これは全学生に問題を——出発点は医学部の不当処分問題、それから大学の使命そのものへの批判から東大エリート教育の自己否定、大学解体に至る——深く

考えさせる契機となりますが、同時に闘争が長引けば無意味になり、長期間勉学を妨げられる学生にとっては、無期限ストは不登校の耐えられない苦痛となります。卒業・就職の展望すら失いかねません。学生運動は大学教育の権威と継続あってこそ成り立つものです。緊急事態のアピールは良いとしても、これは活動家を除いては長期には成り立たない。

こうして駒場の「第二次試験ボイコット」は投票で否決されました。大学が授業を正常化しようとすれば前期試験を実施するのは当然です。これは当時の駒場の活動家牧衷君の回想『運動論いろは』によりますが、活動家はレッド・パージが撤回されていない以上、「再試験もボイコットすべきだ」と主張します。全学連委員長武井昭夫君は再試験ボイコットの戦術は失敗すると読んでこれに反対する。だが牧君たちは都学連委員長高沢君とともに第二次試験ボイコットの言い張って議論に勝ちますが、提案は学生投票で見事に否決されます¹⁰。武井君の見通しが当たっていた。これは普通の学生の動向を推定すれば理の当然でしたが、成功に酔っている活動家には理解できません。加えて主流派の「国際派は『跳ね上がり』」だとの批判が学生の中に浸透します。左翼学生の中に主流派は支持を広げます。私が五一年春、新制東大国際派の建て直しを命じられたのも、主流派に対抗する思想的引き締めのためでした。六八年、大学解体の全共闘運動でも日共系（代々木系）と反日共系（反代々木系）の対立は激しく、相互にゲバ棒・鉄パイプなどを振るう暴力沙汰に及びますが、日共系は東大

当局の学内秩序正常化に協力します。

岡田 これに学生処分が重なります。学内秩序違反を犯すのですから責任活動家は処分覚悟のはずですが、実際は正義感、政治的緊迫感に押されて、反レッド・パージ運動に身を入れたのですから、いざ正式に学生身分を奪われるとなると深刻な事態に直面します。学生時代は三、四年間の短い期間で社会人となる予備の勉強期間にすぎません。入学したのはもともと一定の専門知識・資格を身につけて就職するためです。停学はともかく退学処分となれば予定した将来はぶち壊しです。学費はどうするか、親に迷惑をかける。処分学生は勇気を失うというより人生経路に立ち止まり迷うこととなります。こうして東大は本郷（一〇名）も駒場（一三名）もなく運動指導者は大量処分を受け、私学はさらに多数が過酷な処分を受けます。構内立ち入りも禁止です。

田中 主流派は運動をしなかったのですね。

岡田 主流派はそれ見ろと妨害です。学生処分にはもちろん反対運動を行います、非常に難しい。筋から言えば反レッド・パージの学生大会決議に従っているのだから不当処分ですが、盛り上がりがないことおびただしい。処分反対闘争で再処分となると手に負えない。犠牲者は増えるばかりです。理学部の上田建二郎（後に不破哲三）君は処分反対運動で処分されます。こうして実力行使で「安田講堂を破壊してしまえ」など怒りますが壊せないし、学

部長に足をかけて転ばしたりの嫌がらせでお終い、「万事休す」です。

岡田 その転ばした脇村義太郎経済学部長に、後になって就職で世話になったりして申し訳ない次第ですが、教授側は被処分者は一生懸命で馬鹿ではないと思っています。だから形式的にでも学則違反を認めて一札入れれば、体面は立ちますので大学におけるこの処置には感謝しています。被処分者は責任感あり人望ある友人たちでした。遂に東大に謝らなかつた硬骨漢、安東君や吉川勇一君などもおりましたが、復学した者はそれぞれに立派な生涯を送りました。これは前号（一）で述べたので繰り返しません、京大にはこうした教育的配慮が足りません。私学の退学・放校となるとほとんど再起不能です。東大生はつぶしが利くと言うか、活動家の多くが教授や弁護士になりました。もちろん教授の職をえるには運動とは無関係だった学校秀才諸兄と競争しますから、ブランド四、五年の元活動家は何倍も猛烈に勉強しなければ追いつけません。早大の処分学生の苦勞たるやさらに大変なものです。

田中 （一）に書いてありますね。

岡田 運動の衰退は一〇・一七の早大の「平和と大学擁護大会」における処分反対で大隈講堂に突入し、警察が駆けつけて一四三名が逮捕され、決定的になりました。大隈講堂突入は吉田嘉清君な

ど現場の早大指導部の意向に反した東大全学連指導部の方針によるもので、当夜集会に東大から参加していた部隊が逮捕直前に逃亡した記憶は何時までも残っています¹¹⁾。二八日、早大は八二名の除籍(放校)処分を発表します。一七日の後、東大本郷でも反レッド・ページの宣伝に誰も聞き入る者がなくなりました。私と鈴木正也君とで至急学生アンケート調査を行いました。政治的関心の低下は明瞭でした。活動家にとつて状況は急変しました。当時一〇月末となれば就職一色で三年生には余裕がありません。一〇・二〇全国ストは夢と消えました。運動が衰退して指導部に内紛が起こり、一二月、余力を残す東大本郷指導部の戸塚君が武井委員長を批判し、これが五一年二月の陰惨な国際派スパイ査問事件に至ります。一〇月闘争、なかんずく一〇・二〇闘争失敗の責任追及です。

田中 査問事件は一〇月闘争の結末ですね。査問事件で東大国際派はバラバラになった。

岡田 国際派の解散はもう少し後のことで、五一年八月、中ソ国際共産党が武装闘争(火炎ビン闘争)を方針とする日本共産党主流派支持を明確にしてからです。

一〇月闘争は振り返れば九月末から一〇月半ばまでの短期決戦でした。試験ボイコットで急速に盛り上がり、一〇・五スト、東大での学内集会デモを頂点に、一〇・一七早大での大量逮捕で一挙に衰えました。大量処分による学生側の損害は大きなものがあ

りましたが、大学からの共産主義者の追放は実施不能となり、学問の自由と大学の自治の原則は守られました。新聞放送界での厳しい赤追放を考えれば、これは学生運動の大きな成果で誇つてよいと思います。ただそれに続く経過では国際派学生にせよ主流派学生にせよ惨澹たる結末が待っていました。

五一年四―六月の一六人軍事裁判事件に際して、東大の総長以下全学あげての応援により全員が釈放された闘争は、東大国際派学生運動の最後の華でした。通常は運動弾圧側となる学生委員長、尾高朝雄教授まで占領軍に釈放を陳情しました。占領終結、講和条約の準備は始まりましたが、敗戦後六年、長期化する米軍占領に対する国民の不満は発火点に近づいていました。軍裁で小菅拘置所の監房に閉じ込められていた四月二日、「マッカーサー罷免」のラヂオ放送に接した感激は忘れられません。この闘争と裁判は『わが友に告げん』(筑摩書房、一九五二年)、佐多稲子「みどりの並本道」¹²⁾に記録されています。力石君はこの軍裁闘争こそ国際派学生運動の最大成果だと評価します¹³⁾。

ところで私は軍裁後、東大駒場のオルグとして派遣されます。一〇月闘争以降、主流派に押されて自治会の主導権を奪われた駒場を、再び国際派主導のもとに取り返すために、私は、「国際派は共産党の分派ではないか」との活動家の疑問に回答を与え、国際派こそ国際共産党の正統に属する党派で勝利間近い、と若い同志を説得しました。主流派は反米闘争を実行せず国際共産党と対立している、という趣旨です。あにはからんや国際共産党は共産

党主流派の武装闘争を支持し、日本共産党は全国協議会（党大会に代わる）で武装闘争方針を決定します。八月、私の駒場オルグは大破綻、国際派は解散、滑稽なピエロに終わりました。

岡田 まるで馬鹿です。東大の学生運動と全学連指導部は、五〇年一月のコミンフォルムの野坂批判を徳田球一、伊藤律、野坂参三氏らの「地域人民闘争」の批判と見なし、学生層の全国反米闘争を指示したものと受け止め、国際派を結成しました。中ソ共産党の国際政治方針は全く別のところにありました。これは国際政治経済分析の骨身に沁みだ教訓でした。

四、反レッド・パージ闘争以外の東大自治会の活動

田中 なるほど。では最後になりますが、あとは自治会の活動として、例えば食糧を確保するために運動をするとか、何かそういう学生の生活を守るための運動はなかったんでしょうか。

岡田 ええ、ありましたよ、四八年の国立大学教授料三倍値上げ反対闘争は学生生活の困窮に対して勉学の機会を守る、という趣旨でした。目標は経済的なものです。この時、帰省の際の鉄道半額学生割引を実現しました⁽¹⁴⁾。これは枚数が次第に削減されて高度成長期、勤労青年の帰郷費とのバランスから廃止となりましたが、戦後貧窮状況にあった学生は助かりました。

田中 アイスクリーム売りのアルバイトの斡旋もあったようです

が。

岡田 あれは確実に生活擁護の闘争です。旧制高校に子弟を進学させる地方資産家のインフレ下の没落は激しかったし、学生はアルバイトに追われていました。アルバイトで稼いだ金を両親に送金する学生も少なくありませんでした。当時、「学徒援護会」が学生アルバイトを斡旋していましたが、これは文部省と結びついて不評でした。そこで「中間搾取を排除しよう」と、関東学連（全学連の下部組織）が企画したのが夏休みのアイスクリーム売りでした。四九年、現役の一高生だった奥山秀美君が関東学連の仕事を引き受け、アイスクリーム売りのアルバイトを応募者に割り振っていました。二人一組で売りますが女子学生もいました。私は彼を集合本部のある広場に訪ねたことがあります。その場所がどこだったか、覚えていません。今回奥山君に場所を確かめたところ、「アイスクリーム製造工場に集合場所がなく近くの広場を使ったが、水道橋近くと記憶する」、また「アルバイト代はきちんと支払い、途中赤字を心配したが最終的に黒字で安心した」と語ってくれました。高峰秀子の流行歌「銀座カンカン娘」のレコードが暑い夏の広場に響いていました。

田中 所謂「角帽アイスクリーム売り」ですね。他に何かありますか。

岡田 それから白線浪人問題がありました。学制改革で四九年に旧制廃止となると四七年入学の旧制高校生は卒業する五〇年に一回しか旧制大学を受けられません。戦前のシステムでは高校卒業の

定員と七帝大の定員はほぼ見合っていましたから、希望先を選ばなければ高校卒業生は必ずどこかの帝大には入学できました。戦後、京城帝大、台北帝大が消滅し、軍学校生がそれぞれの学年度に復員し、外地高校生が引き揚げ、高校側は転編入（選抜試験）を認め文系定員を増やしたのに対して、帝大側は定員を増やさずにかえって帝大入試の門戸を高校卒業生以外の高等専門学校卒業生（傍系）にも開きました。そこで帝大系に入学できないあぶれた高校卒業生が大幅に増えました。高卒浪人は四六年卒は五〇〇人だったのに、四七年卒四〇〇〇人、四八年卒七〇〇〇人と激増します。こうして四七年高校入学者（五〇年度大学入試受験者）にとつては浪人の可能性が非常に高くなります。これが白線浪人問題です。

「白線」とは旧制高校生の丸帽子には白い線が二本縫い付けられ、高等専門学校生（大学進学を予定せず）の丸帽子には黒い蛇腹が縫い付けられて区別されたことを表します。「白線」は帝大卒（高等教育六年）角帽へのエリート・コースの象徴、「蛇腹」は高専卒（高等教育三・四年）丸帽の象徴です。旧制中学卒業生の進学試験はまた白線か蛇腹かの人生経路を決定しました。

そこで全学連もこの対策を文部省に求め、五〇年に発生する白線浪人対策として文部省が打ち出したのが、五一年受験の臨時定員での編入試験制でした。これは一浪でも二浪でもよく旧制高校卒業生なら帝大系を受験できる制度です。ただし、旧制大学の募集は五〇年で停止するので、合格者は旧制一年への入学ではなく

新制二年への編入となるが、旧制高校卒なので教養課程は免除、大学の課程は旧制と同じ三年となりました（東北大と九大は五〇年に高校卒業生に限った旧制大学の二次募集を実施しました）。これで助かった高校生は多かったです。涙を呑んだ高校卒業生も少なくありません¹⁵。臨時編入がないと五〇年の浪人は五一年に受験して新制東大一年生とならなければなりません。これは全学連だけの成果ではありませんが、学生生徒の実質利益に貢献しました。

田中 初期全学連の活動は、政治闘争だけではないのですね。

岡田 質問有難う。全学連は政治闘争一本槍と思われがちですが全期間でみれば随分と経済要求や制度改善にも力を尽くしたので

す。これが五〇年となると反米政治闘争が中心となり国際派、主流派の分裂もあって全学連はますます政治闘争に傾斜し、それを批判する主流派は裏での火炎ビン型武装闘争を隠すように、表では学生の日常要求に専念して自転車置場を作れとか細々と学校側に要求します。経済闘争です。国際派がこれを馬鹿にして、米ソから始めて国際情勢、天下国家の大演説をぶれば、主流派は自転車だ便所だと学生を集めて国際派の孤立を図ります。初期全学連のこの面での功績は評価すべきです。

〔注〕

- (1) 佐伯孚治「わが『革命』の同志たち」(『一・九会文集』第三集 一九九八年) 六三―六四頁。なお、「一・九会」については、前号掲載論文の注(6)を参照。
- (2) 『一・九会文集』第六集 二〇〇三年 七二頁
- (3) コミンフォルム批判、およびそれを契機とする日本共産党の分裂については、下斗米伸夫『日本冷戦史』(岩波書店 二〇一一年) 第五章「日本共産党とアジア冷戦」(一八八―二七〇頁)に詳しい。
- (4) 法政大学における試験ボイコット、およびその後の学生処分については、法政大学戦後50年史編纂委員会編『法政大学と戦後五〇年』(二〇〇四年) 九四―一一頁を参照。
- (5) 「三教授事件(問題)」については、前掲『法政大学と戦後五〇年』一一二―一二二頁に詳しい。
- (6) 大野明男『全学連血風録』(21世紀社 一九六七年) 一〇―一一―一二頁、および安東仁兵衛『戦後日本共産党私記』(文春文庫 一九九五年) 一三二頁。なお、安東の記述も大野(一九六七)からの引用である。
- (7) 「キミ・ボク論争」については、前掲『戦後日本共産党私記』六三―六四頁を参照。
- (8) 前掲『全学連血風録』一〇五頁
- (9) 辻井喬『彷徨の季節の中で』(新潮文庫 一九八九年) 一七八―一七九頁
- (10) 牧衷『運動論いろは』(季節社 一九九八年) 四二―五四頁
- (11) 岡田裕之「一六人軍裁事件からわだつみ会の運動へ」(『一・九会文集』第一集 一九九七年) 一三六頁を参照。
- (12) 『新日本文学』一九五一年一月号および五二年一月号に掲載。
- (13) 力石定一「高校リベラリズムとマルクス主義のアマルガムに関するテーゼによせて」(『一・九会文集』第六集 二〇〇三年) 四二頁
- (14) 武井昭夫「層としての学生運動 全学連創成期の思想と行動」(スペース伽耶 二〇〇五年 七四頁)
- (15) 白線浪人問題については、武井昭夫「大学入試と教育の危機―白線浪人問題の本質」(前掲『層としての学生運動』二二九―二四七頁所収)に詳しい。
- (たなか さとこ お茶の水女子大学大学院)